

我出爲此家後、先子將其所什襲先生墨蹟一張、付我且戒勅曰、此聖人之手澤、兒善藏之、勿使不知者汚焉、今吾子慕先生、則使得觀之、乃起更著禮服、出一軸於櫃、捧置案頭、頂禮跪拜者、猶緇徒之崇佛像也、客始起敬以爲藤樹吠畝之一匹夫、而見重于士大夫之間如此、則其道德與世之所謂儒者迥不同、我豈得不禮乎、盥嗽再拜、而後觀之、

〔近世畸人傳〕北村篤所

篤所、北村氏諱可昌、字伊平、卽通名とす、近江野洲郡北村の産也、季吟法印仁齋先生の門人にして、京師に住リ、嘗て院中に召て、學を問せたまはんだため、北面の氏を嗣しめんの内勅ありしかども、異姓を嗣ことをほりせずと、固く辭し奉りし、されども其人を慕せたまふゆゑに、儒服儒巾を制せさせて賜り、玄ひて召しかば、止ことを得ず、是を著て院中に書を講ず、疾の病なりし時も、勘解由小路殿をもて、人參と中山といふ御硯を下し給りしは、隱士の面目と、世に稱せり、

得譽於異域

〔續日本紀文武〕慶雲元年七月甲申朔、正四位下粟田朝臣真人自唐國至、初至唐時、有人來問曰、何處使人、答曰、日本國使、略唐人謂我使曰、丞聞海東有大倭國、謂之君子國、人民豐樂、禮義敦行、今看使人、儀容大淨、豈不信乎、語畢而去、

〔文德實錄〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、略爲性放誕、不拘細節、尤妙隸書、宮門榜題、事迹見在、延曆之季、隨聘唐使入唐、唐中文人呼爲橘秀才、

〔續古事談臣節〕昔高麗國王惡瘡ヲヤミテ、日本ノ名醫雅忠ヲ給ハラント申タリケリ、此事陣ノサダメニ及テ、サマハニ沙汰アリケルニ、帥大納言經信申云、高麗ノ王惡瘡ヤミテシナム、日本ノタメニナニクルシト云ハレタリケル一言ニ、事サダマリテ、ツカハスベカラズト云事ニナリニケリ、サテ返牒イカバイフベキトイフサダメニハ、此事エ申トヲサズトイフベシトテ、匡房卿其狀ヲカキケルニ、申トヲサヌヨシヲカキオホセズシテ、ニタビマデカヘサレニケリ、第三度ニ、双